

京都大学蔵『北京内城図（八旗方位図）』（仮称）に 示される満州・蒙古・漢軍の関連施設とその時代背景

田 中 和 子
木 津 祐 子

はじめに

京都大学文学部地理学教室が戦前に作成した図書カードのなかに、支那として分類されている古地図のカードが三八枚ある。その一枚に、「北京の図（図名不詳） 筆、色 一三八×一五七」（右上に三三の通し番号）と記載されている。この図は、地理学教室編『地理論叢 第三輯』（一九三四）古地図目録^①にも掲載されており、それ以前に購入されたものであることがわかる。同図は、『京都大学所蔵古地図目録』（二〇〇一）では、『北京地割図』（仮題）（一軸）（「備考」北京の地割図。手書手彩色。一七五センチ×一五〇センチ）として挙げられている。^②

この図名不詳の北京の図は、その所在が認められてはいたものの、これまで詳細が明らかにされないままになっていた地図である。本稿は、この地図についての予備的な調査報告である。

調査対象とする地図は、軸装の状態で縦一七〇センチ×横一五〇センチ、図幅部分は縦一五一センチ×横一三五センチの大きさである。⁽³⁾ 題箋を欠く。紙本に、手描きで、墨や朱、青、黄、白などの絵具で彩色されている。紙の折れや剥落、汚れ、絵具や墨の滲み等が多く、保存状態は決して良好ではない。地図に描かれている範囲は北京の内城だけで、南の外城の部分はない。城門や宮殿、寺院、役所、街区、路地、池、水路、橋、井戸、象房などがそれらの名称と共に絵画的に書き込まれている（口絵―図1）。

図幅の左上（城壁の外、北西部分）に、凡例のような形で、

○ 元圈者満州（○印は満州）

□ 方圈者蒙古（□印は蒙古）

△ 尖圈者漢軍（△印は漢軍）

と記載されている。これらの図形は、赤い筆線で描かれている。地図中の多数の○と□と△の記号は、凡例に示された記号よりも小さく、また、赤ではなく、墨で輪郭が描かれている。輪郭の内側は、赤、白、黄、青の四色およびそれらの組み合わせで塗り分けされている。

本稿の表題に示した『北京内城図』は、さまざまな北京の古地図の名称を参考にして付したものである。本資料に関しては、何がどのように描かれているのかだけでなく、名称、地図が作成された年代、作者、地図の作成目的、用途など、基本的な事項についても、明らかにすべき点が多い。これらを解明するための手がかりを得るために、本資料の大きな特徴である、三種の記号（○、□、△）を用いた満州と蒙古と漢軍の所在場所の書き込みに注目し、予備的な調査を行うこととした。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第一章では、清代に作成された北京城図において、満州、蒙古、漢軍の所在を記号で示した地図の例がないか、検討する。第二章では、『北京内城図』で描かれる満州、蒙古、漢軍の数量的な構成と空間的な分布を明らかにし、同類の北京城図に示される満州、蒙古、漢軍との比較を行う。第三章では、地図に書き込まれた文字情報（地名・施設名・自然景観名）から、清代成立の他の北京地図との比較などを通して特徴の一端を示し、本地図の大きな特色である八旗関連施設の所在と、時代特定の鍵となるはずの王公邸第の所在地について、基礎的な考察を行う。第一章と第二章は田中が報告し、第三章は木津が報告する。

注

- (1) 京都帝国大学文学部地理学教室編『地理論叢 第三輯』古今書院、三五―三五八頁まで、地理学教室所蔵の「古地図目録」が掲載されている。「二、支那」の部の、三四として、「北京の図」（図名不詳）が掲載されている。
- (2) 金田章裕編（二〇〇一）『京都大学所蔵古地図目録』京都大学大学院文学研究科、一九六頁。
- (3) 二〇一四年四月より修復を行い、軸をはずし、図面を緩く巻いた形で保存することとした。

第一章 八旗（満州・蒙古・漢軍）の所在を図示する清代の北京城図

地図に、満州、蒙古、漢軍が描かれることから、本地図の作成年代を清代と推測し、まず、この時期に作成された北京城図と比較することにした。近年発行された中国古地図集に掲載された北京城図を中心に、年代順に整理したものを表1に掲げる。これらのなかで、京都大学蔵『北京内城図』に似た満州・蒙古・漢軍の図示がある点で注目されるのは、次の二点の

地図である。すなわち、黄、白、紅、藍という四色の組み合わせで、満族八旗（正黄、正白、正紅、正藍、鑲黄、鑲白、鑲紅、鑲藍）の所在する場所を示した『北京城地図』（二九〇六―一九二一）⁽⁴⁾、また、満州、蒙古、漢軍それぞれの八旗を円形、三角、方形の記号を用いて区別し、それぞれの所在する位置を示した『道光北京内外城全図』（一八四五）（現在、国家図書館所蔵（北京）⁽⁵⁾）である。

『北京内城図』に描かれた三種の記号は、それぞれ、八通りに塗り分けられている。すなわち、単色で塗られているものとして、黄、白、赤、青。記号の縁どり部分と内側部分とが、二色の組み合わせで塗られているものとして、赤（外）―黄（内）、赤（外）―白（内）、白（外）―赤（内）、赤（外）―青（内）。単色塗りの四種は、それぞれ、八旗の正黄、正白、正紅、正藍の各旗と同じであり、二色塗りの四種は、それぞれ、鑲黄、鑲白、鑲紅、鑲藍の各旗の色に対応する。⁽⁶⁾これらの塗り分けは、満州、蒙古、漢軍それぞれに対応する記号⁽⁷⁾ことになされているため、全体では、二十四通りの記号が用いられている。

『道光北京内外城全図』を含めて、膨大な北京城図をほとんど実見しておらず、地図上での表記の内容と形式に基づく判断は慎重に行う必要があるが、『北京内城図』は、『道光北京内外城全図』と同じく、満州・蒙古・漢軍の八旗の所在する場所を示した地図ではないかと推測できる。図幅の大きさの点でも、『北京内城図』と『道光北京内外城全図』とは比較的近い。後者は、前者より、縦横とも数十センチ大判であるが、内城部分の図の大きさはほぼ同程度と考えられる。また、両図とも手描彩色された地図である点も共通するが、『道光北京内外城全図』が絹本であるのに対し、京都大学の地図は紙に描かれている。『道光北京内外城全図』の全体図や部分図を見ると、⁽⁷⁾街区や城壁などの描き方が非常に細やかで丁寧である。これに比べると、京都大学蔵『北京内城図』の描き方は、やや粗い。

では、こうした八旗（満・蒙・漢）の所在地を示す北京図は、数多く存在するのだろうか。『中国古代地図集―城市地図』

表1 清代に作成された北京城図の例と京都大学蔵『北京内城図（八旗方位図）』

Table 1. City Maps of Beijing made in the Qing Dynasty and "Map of Inner City of Beijing" stored in Kyoto University.

地図題目	年代	範囲	大きさcm	形態	八旗の位置	出典
康熙北京城図（北京皇城宮殿衙署図）	1661～1722年間	内城	238×178	彩色絹底	—	(A)、図10、p.171
雍正北京城図	1734年	内城・外城	100×63	墨絵紙本	—	(A)、図11、pp.171-172
乾隆京城全図	1750年	内城・外城	1402×1326	紙本、墨、部分彩色	—	(A)、図12、p.172
首善全図	1796～1820年間	内城・外城	99×64	墨印着色、木版、紙	—	(C)、p.124
北京城区図（Plan de la Ville de Pekin）	1817年	内城・外城	123×98	彩絵紙本	—	(C)、p.146
京城全図	1830～1870年間	内城・外城	103×56	麻布、木版印刷	—	(B)、pp.103-104
道光北京内外城全図	1845年	内城・外城	240×180	彩色絹本	有（満○、蒙△、漢□）	(A)、図13、p.172
北京地図（Plan de Pékin）	1851～1861年間	内城・外城	71×78	彩色紙本	—	(A)、図14、pp.172-173
京師九城全図	1861～1890年間	内城・外城	120×119	絹本色絵	—	(B)、p.102
京師城内首善全図	1870年	内城・外城	53×52.5	墨色石印本	—	(C)、pp.170-171
北京全図	1875～1887年間	内城・外城	98×61	彩絵本	—	(B)、pp.102-103
京城内外全図	1875～1908年間	内城・外城	65×54.5	墨色石印本	—	(C)、pp.176-177
京師城内河道溝渠図	1875～1908年間	内城	77×76.5	二色刷	—	(C)、pp.194-195
北京全図	1896年頃	内城・外城	100×72	墨、彩色	—	東洋文庫蔵
京城内外首善全図	1890～1902年間	内城・外城	61.5×52.2	墨色、紙、石印本	—	(A)、図15
京師全図	1890年～1902年間	内城・外城	107×59	墨印着色	—	(D)、p.31、p.90
京城内外首善全図	1890年～1902年間	内城・外城	62×53	墨印	—	(D)、p.32、p.90
京城各国暫分界址全図	1900～1904年間	内城・外城	63×55	彩色紙本	—	(A)、図16、pp.173-174
北京城地図	1906～1911年間	内城・外城	76×56	彩絵	有（満族）	(D)、p.30、pp.89-90
京師全図	1908年	内城・外城	96.5×57	石印彩色	—	(C)、pp.228-229
京城詳細地図	1911年	内城・外城	78.5×59	墨印、紙石印本	—	(A)、図17、p.174
京城詳細地図	1911年	内城・外城	94×64	墨印	—	京都大学蔵
清北京城	1909～1911年間	内城・外城	92×61	彩色紙本	—	(A)、図18、p.174
訂正改版北京詳細地図	清末	内城・外城	61.5×46	墨色石印本	—	(C)、pp.202-203
北京内城図	調査中	内城	図(151×135) 軸(170×150)	彩絵	○（満州） □（蒙古） △（漢軍）	京都大学蔵

出典：

- (A) 鄭錫煌（編著）（2005）『中国古代地図集—城市地図』西安地図出版。
 (B) 李孝聡（編著）（2004）『美国国会図書館蔵中文古地図叙録』文物出版社。
 (C) 中国国家図書館／測絵出版社（編著）（2010）『北京古地図集』測絵出版。
 (D) 劉鎮偉（主編）（1995）『中国古地図精選』中国世界語出版。

（二〇〇五）における『道光図』の解説には、北京における八旗ならびにその変化についての研究にとって、数少ない貴重な資料と書かれている。⁽⁸⁾ 孫果清（二〇〇五）は、『道光図』は、内外城の地図としては、現在知られている中で唯一のものであり、他には、イギリスのSPINK社が所蔵している、紙製の『北京内城図』のみであると述べている。⁽⁹⁾ 京都大学蔵『北京内城図』は、清代における北京の八旗研究にとって、稀少かつ貴重な地図資料である可能性が高い。

注

- （4） 劉鎮偉（主編）（一九九五）『中国古地図精選』中国世界語出版、図二八、三〇頁および八九―九〇頁。以下、中国出版の文献は、原表記が簡体字、繁体字を問わず、全て、日本語常用漢字を用いることとする。
- （5） 鄭錫煌（編著）（二〇〇五）『中国古代地図集―城市地図』西安地図出版、図十三、および一七二頁。
- （6） 李洵・趙德貴・周毓方・薛虹主校點（二〇〇二）『欽定八旗通志』吉林文史出版社。
- （7） 前掲（5）、十一頁、二四三頁。
- （8） 前掲（5）、一七二頁。
- （9） 孫果清（二〇〇五）『彩色道光北京内外城全図』（鄭錫煌（編著）『中国古代地図集―城市地図』西安地図出版、二四四頁。李孝聰（一九九六）『欧州収蔵部分中文古地図叙録』国際文化出版公司ならびに李孝聰（一九九四）『記英国倫敦所見四幅清代繪本北京城市図』国学研究第二卷、四四九―四八一頁によると、SPINK社所蔵『京師内城図』（一八六一年頃）（二六×一四〇センチ、彩絵・紙本）の他、イギリスの王立地理学協会所蔵『京師内城図』（一八六五年頃）（二七六×一五七センチ、彩絵・絹本）、大英図書館所蔵『精繪北京旧地圖』（一八〇〇―一八一五年頃）（一八五×二二〇センチ、彩絵・紙本、内城と外城）にも、八旗（満・蒙・漢）が四色の塗り分け記号で描かれている。

第二章 満州と蒙古と漢軍ごとの八旗の構成と空間的分布

表2 京都大学所蔵の『北京内城図（八旗方位図）』に描かれた満州と蒙古と漢軍を示す記号の分類と数量

Table 2. Classification based on the coloring patterns and their numbers of three marks indicating Manchu, Mongolian, and Han in Map of Inner City of Beijing stored in Kyoto University.

色の組み合わせ			満州	蒙古	漢軍	対応が推測される旗
			○	□	△	
単色	単一輪郭線	黄	48	9	11	正黄旗
		白	32	17	10	正白旗
		赤	33	11	11	正紅旗
		青	43	14	19	正藍旗
	二重輪郭線	黄	—	—	—	—
		白	6	4	—	—
		赤	5	2	—	—
		青	5	—	—	—
二色	外側	内側	○	□	△	
	赤	黄	52	14	23	鑲黄旗
	赤	白	28	21	10	鑲白旗
	白	赤	35	12	10	鑲紅旗
	赤	青	36	8	15	鑲藍旗
合 計			323	112	109	

注) □には、他に、内側の輪郭線が○で赤く塗られたものが1、輪郭線のみ描かれ、無彩色のものが1ある。

第一節 八旗（満州、蒙古、漢軍）の記号と種類と構成

先述したように、地図中に描かれた、○（満州）と□（蒙古）と△（漢軍）の記号は、それぞれ四色とそれらの組み合わせで八通りに塗り分けされている。

『北京内城図』に描かれた、八旗（満州、蒙古、漢軍）を表す記号を分類し、それぞれの数を示す（表2）。前述したように、資料の保存状態が良好でなく、剥落や滲み、汚れで判読が難しい部分もある。墨で書かれた二重の輪郭線を単色で塗りつぶした記号は、輪郭を誤って描いたのか、二色使うべき絵の具を誤って単色にしたのか、あるいは、改廃・移転を示すなど、別の意図をもった表記なのか、現段階の調査では判断しがたい。そこで、単色に塗られた二重輪郭線の記号群（表2）は、分類留保として扱うことにする。

分類留保等を含めて、記号の総数は、五四六である。満州が最も多く、蒙古、漢軍それぞれの約三倍である。記号の色の組み合わせ（対応する旗）ごとに見ると、赤

表3 『道光北京内外城全図』の内城および皇城における各旗の構成一覧

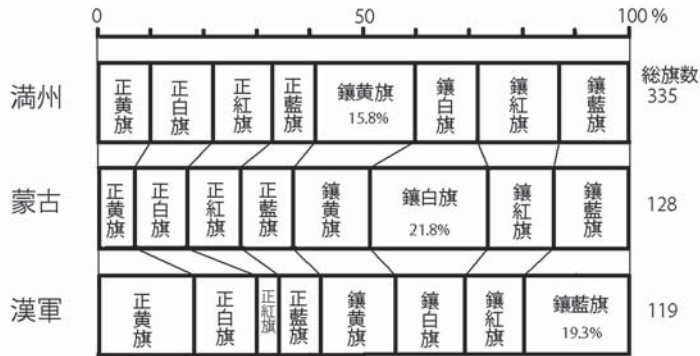
Table 3. Numbers of the blocks of the "eight-banners" in garrison by Manchu, Mongolian, and Han in "Complete Map of the Inner and Outer Cities of Beijing" in Emperor Daoguang's Reign.

区域	旗	満州軍	蒙古軍	漢軍
		○	△	□
内城	正黄旗	25	9	22
	正白旗	34	13	14
	正紅旗	33	13	5
	正藍旗	22	12	9
	鑲黄旗	53	19	17
	鑲白旗	32	28	15
	鑲紅旗	43	16	14
	鑲藍旗	39	18	23
計		281	128	119
皇城	正黄旗	9	—	—
	正白旗	6	—	—
	正紅旗	4	—	—
	正藍旗	5	—	—
	鑲黄旗	10	—	—
	鑲白旗	7	—	—
	鑲紅旗	9	—	—
	鑲藍旗	4	—	—
計		54	—	—

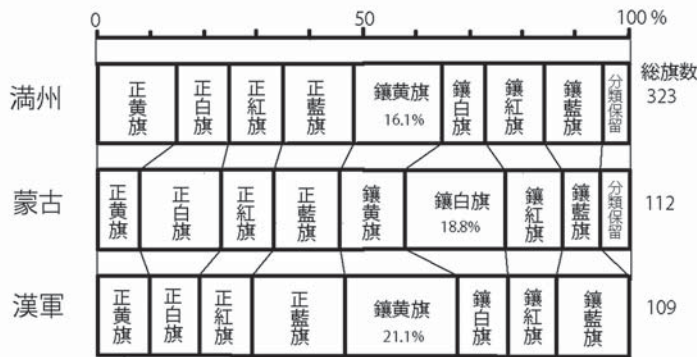
注) 孫果清 (2005)「彩色道光北京内外城全図」(鄭錫煌 (編著)『中国古代地圖集—城市地圖』西安地圖出版)、表2をもとに作成。

(外)―黄(内)、すなわち、鑲黄旗が最も多く八九、次いで、単色の青すなわち正藍旗である。最も少ないのは、単色の赤すなわち正紅旗の五五である。八種類の塗り分け(旗)の間では、極端な偏りは見られない。では、『道光北京内外城全図』では、満・蒙・漢の八旗構成はどのようなであろうか(表3)。興味深いのは、『北京内城図』と『道光北京内外城全図』の間での記号の使い方の違いである。前者では、蒙古を□、漢軍を△で示しているが、後者は逆で、蒙古が△、漢軍が□である。

孫果清 (二〇〇五)⁽¹⁰⁾は、内城と皇城に分けて、三軍の八旗構成を示している。総数五八二、満州は、他のそれぞれ、約三倍を占める。旗別では、最多が鑲黄旗で九九、これに次いで多いのは、鑲白旗と鑲紅旗の八二である。最少は正藍旗の四八であり、



A. 『道光北京内外城全図』における八旗（満、蒙、漢）の構成比



B. 京都大学蔵『北京内城図（八旗方位図）』における八旗（満、蒙、漢）の構成比

図2 『道光北京内外城全図』と『北京内城図』における八旗（満、蒙、漢）の構成比（グラフAおよびB）

Figure 2. Constituent ratios of the eight-banners in garrison of Manchu, Mongolian and Han appearing in "Complete Map of Inner and Outer Cities of Beijing in Daoguang's Reign" (Graph A) and "Map of Inner City of Beijing" (Graph B).

鑲黄旗の半分以下である。満・蒙・漢の構成比や、鑲黄旗の数が最も多い点は、両方の地図に共通するが、八旗の間での構成の偏りは、『道光北京内外城全図』のほうが強い。

満州と蒙古と漢軍との間では八旗の構成にどのような違いがあるだろうか。図2に、『道光北京内外城全図』と京大『北京内城図』、それぞれについての構成比のグラフを示す。グラフは、満、蒙、漢それぞれの総旗数を100%としたものである。満州については、最多が鑲黄旗、蒙古の場合は、鑲白旗が二〇%前後を占め、第一位である。これらの特徴は、二つの図に共通している。これに対して、漢軍の構成は、両図の間でかなり大きく

相違する。『道光北京内外城全図』では、鑲藍旗と正黃旗とが占める割合が高いが、『北京内城図』では、これら二つの旗の比率は比較的少なく、代わって、鑲黃旗と正藍旗とが大きな割合を占める。

八旗の総数と構成、満・蒙・漢の構成の違いなどの点から検討すると、『道光北京内外城全図』と『北京内城図』とは全体としてよく似てはいるが、同じ時期に、同一の資料に基づいて描かれたとは考えにくい相違がある。

注

(10) 前掲(9)、二四四頁、表2。

第二節 北京内城における満州と蒙古、漢軍の空間的分布とその特徴

前節で明らかにしたように、満州、蒙古、漢軍、それぞれが八旗を構成し、全体で二十四種類の旗の駐营地が北京内城に分布している。詳細に検討すると、図中で旗の記号（○、□、△）の置かれている場所はさまざまである。街区（建物）の中心に置かれているもの、街区（建物）内で道路に接する箇所にあるもの、街区（建物）と道路の境界線上にあるもの、道路（広場）にあり街区（建物）と接する箇所にあるもの、皇城に接する位置にあるものなどのほか、橋が架けられた交差点の四つ角すべてに配置されているケースもあるし、水域内に置かれている記号もある。○記号と□記号については、配置の方向性が仮にあったとしても判読できないが、△記号については、さまざまな向きで配置されていることがわかる。北向きの△が多数を占めるが、東向き、西向き、南向きのものもある。街区（建物）から道路を向く記号もあるし、逆もある。皇

城を向く記号もある。こうした記号の種類と位置の多様性については、今後の検討課題としたい。

本稿の紙面の大きさの制約から、二十四種類の記号の違いや、街区や道路と記号の位置関係、記号の向きなどすべてが識別できるような分布図を描くのは困難である。また、記号（旗）の一部に分類留保のものが含まれることを踏まえ、本稿では、分析の第一段階として、記号の形の違い、すなわち、満州、蒙古、漢軍に注目して、これらの旗の空間的分布を把握することにする。

□絵—図3は、本資料に描かれた地図の要素のなかから、内城の外壁と皇城の壁、紫禁城の壁、水域のみを抽出して描いたものをベースマップとし、その上に満州、蒙古、漢軍の戌守地点をプロットしたものである。

満州を示す○記号は、紫禁城の内側を除き、内城の全域に広く分布している。また、皇城の内部を含めてその北側から内城の北辺までは、満州の占有域である。これに対し、蒙古を示す□記号と漢軍を示す△記号は、南西隅以外の三隅と内城の城壁に近い周辺部に多く分布する。とりわけ、南側の城壁に沿って、紫禁城の南に分布するのはほとんど漢軍であり、その両側に蒙古が分布している。皇城の東壁外側に沿って蒙古が一行に並んでいるのに対し、皇城の西壁中央付近から北の方向に漢軍が連なっている。

皇城の東西の両側域においては、満州と蒙古、漢軍が完全に分離した状態ではないが、三軍の完全な混在域もない。それぞれが、比較的狭い範囲でまとまった地区を形成し、それらが入れ替わりながら並び、全体としてはモザイクのような構成となっている。これらのモザイクの配列に規則性は見られない。こうしたモザイク状のパターンが形成要因を明らかにするのは今後の課題の一つであるが、各旗の所轄区域において満・蒙・漢の各階級の参領ごとに佐領の所在地が細かく割り当てられていることなどが関わっている可能性がある。⁽¹⁾

本節で明らかにしたような三軍の八旗の空間的分布の特徴は、『八旗通志初集』巻二などの文献に記載された三軍の空間

的配置とは様相を異にするようである。『八旗通志初集』巻二と『京師全図』（光緒末年作成）を照合した張立宇（二〇一三）は、南の城壁に沿う中央部分を満州が占める、蒙古の分布域が非常に狭い、蒙古が満州と漢軍の間に位置する、漢軍が最も外側に位置する等の指摘をしているが、これらは、京都大学蔵『北京内城図』の八旗（満・蒙・漢）の分布の特徴とは必ずしも一致しない。

文献に記載された配置と地図に示された配置とが異なることは、『道光北京内外城全図』を分析した孫果清（二〇〇五）も指摘している。⁽¹³⁾ 詳しくは、第三章を参照されたい。

注

(11) 前掲（6）、卷三十、旗分志三十「八旗方位総図」、四九五～五三二頁。

(12) 張立宇（二〇一三）「北京における八旗の所領範囲の復元及び風水思想」関西大学地理学研究会会報六九号、四―五頁。

(13) 前掲（9）、二四一―二四四頁。

第三章 『北京内城図』記載の地名・施設名に現れる特徴

本学所蔵の『北京内城図』には、多くの文字情報が含まれる。それらは、坊巷・地名、王公府第・官庁・八旗衙門・寺廟などの施設名、さらに、果樹園や植栽、井戸や土盛りなどといった土地景観名にまで及ぶ。これらは、本地図の成立年代や成立背景を探る上で不可欠の文字情報である。

本章では、地図内に描かれる王公府第名と八旗関連施設名を取り上げ、主な特徴を論ずることとしたい。

第一節 王公府第名から見る時代背景

左に挙げる図4は、本学所蔵『北京内城図』に描かれる府第と八旗関連施設の位置と名称を示したものである。

本図には、多くの王公府第が描かれる。その多くは、敷地を黄色く塗り、門楼も鮮明に描き込まれる。王公府第の多くは、時代が変わっても場所は移さず、家の主は世襲によつて交替し次世代へと受け継がれるが、位階の降格、新たな下賜や売買など特段の理由が有った場合は、別の家統に移譲されることも有った。孫果清(二〇〇五)⁽¹⁴⁾は、中国国家図書館蔵『道光北京内外城全図』(以下、「道光図」と略称)に描かれる府第名を、乾隆十五年成立の『乾隆京城全図』(以下、「乾隆図」と略称)と比較し、同地図の描図年代を、上限を道光二十四年(一八四四)、下限を道光二十九年(一八四九)に絞り込んでいる。本学所蔵の『北京内城図』(以下、「京大図」と略称)でも、これら先行地図と同じ場所に府第の多くは存在するが、その居住者である王公名の記載には顕著な異同が見出される。それら王公名の相違を手がかりに、京大図が描く北京内城の時代性について、本章では初歩的な考察を試みることにする。

下に挙げる表4は、上述の孫(二〇〇五)に掲載された乾隆図と道光図との比較表に、京大図所掲の府第名を対照させたものである。区域番号の甲・乙・丙・丁は、市街区を甲Ⅱ東北域、乙Ⅱ東南域、丙Ⅱ西北域、丁Ⅱ西南域に四分割した符号で、東西を分けるのは、鼓楼と正陽門を結ぶ南北のライン、南北を分けるのは、阜成門と朝陽門を結ぶ東西のラインである。これら四つの区域については、以下の図5をご覧いただきたい。

この三地図を比較すると、例えば、甲1・甲2・甲5・丙4などでは、京大図は道光図の方により同類の府第名を示すので、恐らく道光図に近い時代の有り様を反映することが予想される。それでは、本学所蔵図が独自に有する呼称は、いかなる時代性を有するであろうか。以下、幾つか特徴的な例を取り上げて検討を加えることにする。

表4 乾隆図・道光図・京大図間の府第名対照表

Table 4. Comparative table of official residences' names written in the three maps of City of Beijing: the two maps made in Qianlong's Reign and Doaguang's Reign, and the map stored in Kyoto University.

孫 (2005) が与える符号	京大『北京内城図』	乾隆図	道光図
甲1	十王爺府	貝勒球琳	十王府
甲2	額付府 (ママ)	恂郡王府	額駙府
甲3	王府	慎郡王府	貝勒府
甲4	貝子府	果親王府	端親王府
甲5	成王府	(無名)	成親王府
甲6	公府	固山貝子弘景	公府
甲7	(無名)	(無名)	慶郡王府
甲8	恭王府・羅王府	莊親王府	莊親王府
甲9	(無名)	愉郡王府	(無名)
乙1	棍公府	和敬公主府	大額駙府
乙2	榮貝子府	貝勒裴蘇	進公府
乙3	榮貝子府	和親王府	和親王府
乙4	公府	誠親王府	(無名)
乙5	貝子府	履親王府	四爺府
乙6	(無名)	愉親王府	(無名)
乙7	空府	貝子弘龍	公府
乙8	五爺府	恆親王府	王府
乙9	九爺府	怡親王府	懋親王府
丙1	七爺府	(無名)	貝子府
丙2	都王府	簡親王府	王府
丙3	公府	輔國公伊爾登	公府
丙4	克勤王府	平郡王府	克勤郡王府
丙5	禮王府	康親王府	禮親王府
丙6	王府	(無名)	王府
丙7	老八爺王府	(無名)	貝勒府
丙8	城公府	公府	成公府
丙・補1 (京大図による)	順王府	順承郡王府 (※※)	(無名)
丁1	王府	信郡王府	王府
丁2	公府	裕親王府	公府
丁3	(無名)	輔國公盛昌	公府
丁4	貝子府	(無名)	貝勒府
丁5	王府	輔國公如嵩	公府
丁6	貝子府	寧郡王府	貝子府
丁7	惠親王府	(無名)	惠親王府
丁・補1 (京大図による)	霞公府 ※	(無名)	(無名)
丁・補2 (京大図による)	肅親王府	顯親王府 (※※)	(無名)

注) 孫果清 (2005) 「彩色道光北京内外城全図」(鄭錫煌 (編著) 『中国古代地図集—城市地図』西安地図出版)、図1および表1をもとに、京都大学蔵『北京内城図』の地名情報を並記。

(※) 『北京歴史地図集 (第一集)』(侯仁之編、北京出版社、1988) 「宣統年間・清北京城図」及び「民国六年・民国北京城」には、該当する場所に「霞公府」の文字が見える。

(※※) 『乾隆京城全図』(国立情報学研究所 - デジタル・シルクロード・プロジェクト 『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブ <http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/II-11-D-802/>) による。

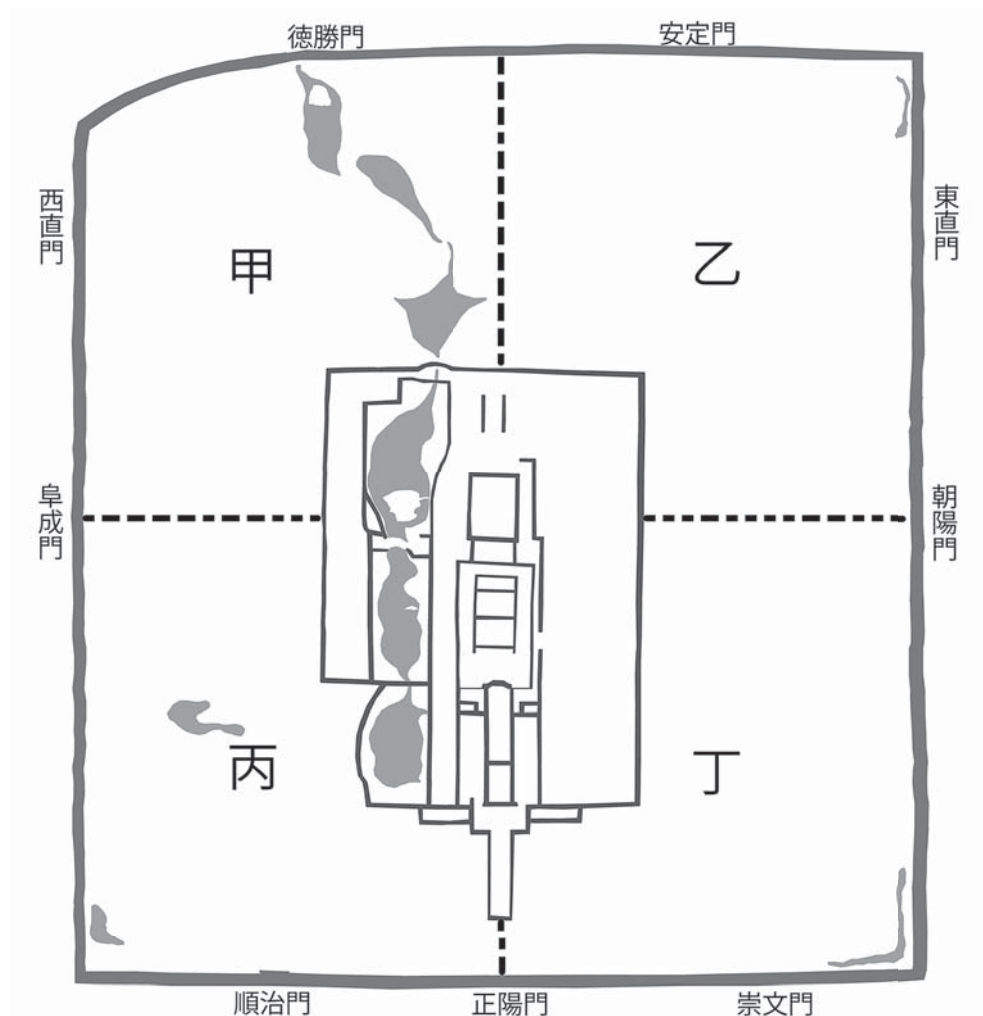


図5 北京内城区分図：皇城周囲の四地区

Figure 5. Reference map of four districts surrounding the Imperial Palace of Beijing.

（1）「五爺府」「七爺府」「九爺府」
 まず、京大図で目を引くのは、「五爺府」「七爺府」「九爺府」等の呼称である。清代の慣習から考えて、恐らくこれは皇子の排行を示すものと推測される。今回、『清史稿』及び『道咸以来朝野雜記』の記述を考証することにより、これら「五爺府」「七爺府」「九爺府」は、果たして道光帝の第五子、第七子、第九子にそれぞれ該当することが明らかとなった。

「五爺府」

京大図に示される「五爺府」は、朝陽門内斜街口（京大図での地名表記）に位置する。この場所は、道光図では「恆親王府」

と記されるのだが、『京師坊巷志稿』⁽¹⁵⁾『道咸以来朝野雜記』では、その地には嘉慶帝第三子錦愷の「惇親王府」(『京師坊巷志稿』・「惇郡王府」(『道咸以来朝野雜記』)が在ったとされる。『道咸以来朝野雜記』の記事は次の通りである。

皇三子錦愷、封惇郡王、後晉親王、府在朝陽門内東斜街。⁽¹⁶⁾

「東斜街」は、京大図の「斜街口」に相当する。この錦愷という皇子は、自身の息子奕繼が有爵者ではなかったため、道光帝の第五子奕諒(一八三一～一八三九)がその爵位を継承している。つまり、この第五子奕諒の継承した府第が、道光図の惇郡王府、つまり京大図で記す「五爺府」である。

惇恪親王綿愷……。 (嘉慶)二十六年、以皇五子奕諒為綿愷後、襲郡王。 (『清史稿』卷二二一「諸王列伝七」)

「七爺府」

次に内城西南隅の太平湖のほとりに位置する「七爺府」を見てみよう。この場所に府第を構えたのは、『道咸以来朝野雜記』によると、まさしく道光帝第七子の醇郡王奕譞⁽¹⁸⁾(一八四〇～一八九二)であった。

醇王府初在太平湖、為榮王永琪邸。此府最好、園林亦佳。 (『道咸以来朝野雜記』二頁)

この醇郡王奕譞は光緒帝の実父であり、光緒帝即位(一八七五)後、官職を退き府第を徳勝門後海の、京大図で「成王府」とする府第に移している。つまり、太平湖の府第を「七爺府」とし、徳勝門後海の府第を「成王府」とする京大図は、道光三十年(一八五〇)から光緒元年(一八七五)までの状況を示すと考えられるのである。

「九爺府」

最初に見た「五爺府」にほど近い、朝陽門内北小街(京大図の地名表記)に位置するのが「九爺府」で、これもやはり、道光帝第九子の孚郡王奕譔(一八四五～一八七七)の府第であった。奕譔の府第は、『道咸以来朝野雜記』には「在北小街怡王邸、直至民國十六年、析貝子始出售」(三頁)と記され、本地図の所在地にびたりと合致する。ここに名前の挙がる「析

貝子」とは、咸豐帝の皇子載瀛の子溥忻のことで、『北京歴史地図集』（侯仁之編、北京出版社、一九八八）所載の「宣統年間・清北京図」には、確かに当該地に「忻貝子府」との文字が見えている。

以上、「五爺府」「七爺府」「九爺府」という表記法から考えて、本地図が反映するのは、当該皇子の在世（在位）期間の下限に遠くない時代、十九世紀後半のことであつたと見なすことができるであろう。「七爺府」の存在期間を重視するならば、さらに、道光三十年（一八五〇）～光緒元年（一八七五）と絞り込むことも可能かも知れない。

（2）「恭王府・羅王府」「棍公府」

乾隆図・道光図ともに「莊親王府」と記す位置に、京大図は「恭王府」と「羅王府」という二つの府第を記す。「羅王府」が誰の府第を指すのか、現時点では未詳ながら、「恭王府」については、（1）で論じた諸皇子と同様に、道光帝の第六子の恭親王奕訢の府第と考えられる。『道咸以来朝野雜記』に、

恭王府在後門西三轉橋、和坤舊第。初為慶郡王永璘第、咸豐初、賜六爺居。（2頁）

と記するのがこの府第である。「六爺」は恭親王奕訢のことである。

もとの慶郡王永璘の府第を「六爺」恭親王に移譲したのは、咸豐元年（一八五二）のことだとされるので、京大図が示すのはそれ以降の状況ということになるうか。（1）で導いた道光三十年（一八五〇）～光緒元年（一八七五）という仮説も、この条件に合致する。

また、乾隆図で「和敬公主府」とされる府第を、京大図が「棍公府」と記すのも興味深い。和敬公主は乾隆帝の皇女で、乾隆年間に蒙古の科爾沁部輔国公色布騰巴勒珠爾に嫁ぎ、婚後の住まいとして与えられたのがこの府第とされる。建物、色布騰巴勒珠爾の一族によって世襲され、道光二十八年（一八四八）から同治十一年（一八七二）にかけて、同族の棍楚克林沁が鎮国公の位についている（『清史稿』卷二〇九「藩部世表一」。京大図の「棍公府」という名称は、その期間にこの「和

敬公主府」に対して用いられた呼称を示すのかも知れない。隣接する「成公府」及び「榮貝子府」との関連を含め、今後さらに考察を進める必要がある。

注

- (14) 孫果清(二〇〇五)「彩色道光北京内外城全図」、鄭錫煌編著『中国古代地圖集—城市地圖』(西安地圖出版)
- (15) 清・朱一新著『京師坊巷志稿』(北京古籍出版社、一九八二) 一二三頁
- (16) 崇彝著『道咸以來朝野雜記』(北京古籍出版社、一九八二) 一頁。以下、本書の引用はすべてこのテキストに拠る。
- (17) 「子奕繼、封不入八分公。」(『清史稿』卷三二「諸王伝七」)「不入八分公」というのは、有爵者に列せられないことを言う。
- (18) (道光) 三十年正月丁未、……封弟奕訢恭親王、奕譞醇郡王、奕訢鍾郡王、孚郡王。(『清史稿』卷二〇「文宗本紀」)
- (19) 許放「慶王府的變遷」『近代京華史跡』(中国人民出版社、一九八五年) 一二—一二〇頁。

第二節 地名から見る時代背景

前節で見たとおり、王公府第に対する京大図独自の呼称は、十九世紀後半にその邸宅の主であった人物名を反映するものが多く、京大図が描く時代も、十九世紀後半の現状であったとの推測が可能である。本節では、同じ時代性を示唆する別の事例を挙げ、検討してみることとしたい。

(1) 「東交民巷」

京大図の東南域、崇文門にほど近いエリアに「東交民巷」の四文字が記される。この地は、清末に列強によって治外法権地帯として分割統治された、所謂「使館街」(Legation quarter)の中国側呼称として知られる。しかし、京大図のこの地域に、列強の治外法権を示す大使館群は全く記されていない。周知の通り、一八六〇年のアヘン戦争後、イギリス、フランス、ア

メリカ、そして日本など諸外国は続々とここ「東交民巷」に大使館や兵舎などを建設した。建設地として利用したのは、清朝の兵部・工部・鴻臚寺・欽天監・翰林院など、朝廷の中核となる官署群、そして元・明の会同館・四夷館の流れを汲む四訳館や、高麗館などの公的対外施設、そして王公の大邸第であった。京大図では、「東交民巷」という地名から連想される諸外国の大使館群は全く記さない代わりに、兵部・工部・鴻臚寺・欽天監・翰林院、四訳館・高麗館・達子館など、清朝独自の官署群を残すこと無く記している。これは何を意味するのであろうか。

アヘン戦争当時、この一帯の正式名称は「東江米巷」であって「東交民巷」ではなかった。ただ、「東交民巷」という呼称も同時に存在していたらしい。光緒十一年（一八八五）成立の『光緒順天府志』巻十三「坊巷上」の「東江米巷」下注に引く『嘯亭續錄』（光緒六年・一八八五序）に、「貝子博和託宅、在東交民巷⁽²⁰⁾」と記するのは、その一例である。

但し、本地図が何らかの意図をもって、諸列強による分割以前の土地情報を、記録として書き留めたという可能性も完全に排除することはできない。この一見矛盾した状況を考えるヒントは、次の（2）に示す二つの府第名にある。

（2）「貝子府」と「肅親王府」

京大図「東交民巷」には、官署群の他に、「貝子府」と「肅親王府」という二つの大邸第が書き込まれている。このうち「貝子府」は道光図では「貝勒府」と記され、「肅親王府」は乾隆図に「顯親王府」と記載される（表4参照）。

『光緒順天府志』巻十三「坊巷上」、「東西河沿」の注には次のように記す。

采訪冊…肅親王府在御河橋東。嘯亭續錄、惇親王府在御河橋西岸。謹案、……惇王諱允祐、聖祖七子、諡曰度。裔孫奕

梁降襲後、俗稱梁公府、今廢為英國使館。（三四五頁）

京大図に記す「肅親王府」は、この「肅親王府」に所在地も名称も合致するので問題はない。

一方、「貝子府」に相当する場所に存在するのは、上の注に従うと「惇親王府」となる。『清史稿』巻一六四「皇子世表四・

聖祖系」には、この「允祐」は「晉淳親王」に封ぜられたとあるが、『光緒順天府志』は同治帝の諱「淳」を避けて「惇親王」と表記するので、「惇親王府」の主が「淳親王允祐」であるのに疑いの余地はない。この「世表」をたどると、「允祐」から数えて四代目に「奕樸」があり、同じ引用で「奕梁」と記すのも、恐らく正しくはこの「奕樸」のことであろう。『清史稿』ではこの人物を、

道光十八年、封三等鎮國將軍。咸豐元年、襲鎮國公。同治十一年、加貝子銜。光緒十三年、卒。

（卷一六四「皇子世表四・聖祖系」）

と記す。

しかしながら、彼が貝子の爵位を獲得したのは同治十一年（一八七二）で、彼がイギリスにその府第を提供したのは貝子となる十二年前の一八六〇年である。この地に王公府第が存在した時代に門を構えていたのは、あくまで「貝子」になる前の奕樸府つまり「梁（樸）公府」でしかあり得ない。したがって、この邸第を「貝子府」と記すのは、彼以前の邸主が有した爵位による呼称と見なすべきである。奕樸の父「綿清」を調べてみると、この人物は、『清史稿』の記載では道光元年（一八二二）に「貝子」の爵位を与えられ、咸豐元年（一八五二）に歿している。一八六〇年以前の邸第の主として相応しい。京大図で「貝子」と称するのは、恐らく奕樸の父「綿清」であろう。

京大図は、次節でも論ずるとおり、地名や施設名の多くに民間俗称を用い、その表記も通俗字体や当て字を多用する。府第名も、前節で見たように「五爺府」「七爺府」「九爺府」（五番目の坊ちゃんのお屋敷……の如き呼称）等々の俗称を避けることなく用いていた。その例に鑑みると、この邸第についても、綿清の死後すぐに、相続者の息子に呼称を改めて（「梁（樸）公府」等）民間で定着したとは考えにくい。ある程度二つの呼称が併用される時期があったであろう。従って、この府第の名称は、当該地域の一八二一年から一八六〇年に到る何れかの時点、恐らくはより一八六〇年に近い時点の状況を示すもの

と、ここでは考えておきたい。

以上、「東交民巷」に描かれる官署や王公府第名に鑑みて、本地図は、当該地域が諸列強大使館に分割される以前の都市景観を反映したものと見なすこととする。

注

(20) 清・周家楣『光緒順天府志』第二冊（北京古籍出版社、一九八七年）345頁。以下、本書の引用頁数はすべてこのテキストに拠る。

第三節 通俗字と俗称の使用

京大図には、多くの略字や当て字が存在する。印刷の便を考慮し、本稿では、地名は原則的に繁体字によって表記するが、京大図の性格に繋がる幾つかの特徴的な用字法については、印刷で可能な限りは、なるべく原文通りの表記を採用したいと考える。以下、主な特徴を簡単に整理しておくこととしよう。

(1) 「寧」

本地図の多くは、「寧」を、「甯」「寧」という字体を用いて表記する。例えば、「永甯胡同」「廣寧伯街」などがそれである。これは道光帝の諱「旻寧」を忌避したものと思われるが、中には、「寧」のまま用いたり、後で修正紙を貼り付けて字を改めるなどした例も多い。本地図は道光年間以降の成立と考えるべきであろう。

(2) 八旗の表記―「廂」「汗」

京大図は、第一章・第二章で詳しく論じられたように、図中に八旗駐营地の所在を、○△□の符号によって示す。八旗は、公的には鑲黃・正白・鑲白・正藍・鑲藍・鑲紅・正紅・正黃と表記されるが、京大図では、この「鑲」をすべて北京語で同音の「廂」を用いて表記する。「正」で始まる四色は、すべて単色の旗色であるのに対し、「鑲」は、図柄の周囲を別の色で縁取る旗のデザインを示すことに由来するとされる。「廂」字を用いるのは、同音仮借の通俗用法である。

また、八旗関連衙門の中で「廂藍汗廳」「汗軍廳」「廳」は下文で言及する通り、「廂」「听」と表記される」と記すものが見られるが、この「汗」は、「漢」と同音であり、「漢」の略字として用いたものであろう。管見では、このような略字の用法は他に知らない。本地図の用字の通俗性を示す顕著な例である。

(3) 俗称・俗字体・当て字の使用

京大図は、北京内城九門のうち、「宣武門」に対して民間の俗称である「順治門」を使用する。公的な地図類にこの呼称が登場するのは極めて珍しい。前節でも見たように、王公府第名に「五爺府」「七爺府」など、民間用法めいた呼称を用いているのと併せて、本地図の性格の一つと見なし得る。それ以外にも、本地図には以下のように特徴的な俗字体や当て字が散見する。

廳 ↓ 廂、听

「廂」は、明清の通俗話本小説などにもしばしば用いられる「廳」の俗字体である。「听」はさらにそれを簡略化したもので、通常は「廳」の代わりに用いられることはないが、京大図での使用数は、「听」が「廂」を上回るほどである。一つの特徴と見なせよう。

園、圓 ↓ 元

本地図の左上の、使用記号に関する凡例部分に、そもそもこの「元」が用いられる。「元圈者滿洲」(○印は滿州)は、本

来ならば「圓」とならねばならない。寺院名（もしくは胡同名）を指す「前元寺」と「後元寺」は、所在地から考えると、恐らくは「前圓（恩）寺」と「後圓（恩）寺」であろうし、また、「菜元」は「菜園」、「花元」「葡萄元」も「花園」「葡萄園」であろう。これらも極めて通俗的な用字法である。

他には、

「城隍廟」↓「成皇廟」、「駙馬」↓「付馬」、「王府」↓「王付」、「油漆作」・「油房」↓「由漆作」・「由房」、
「財神廟」↓「才神廟」、「花枝」↓「花支」、「鉄匠」↓「鉄醬」

などの表記がそれぞれ複数回出現する。偶然の過誤ではなく、一定の用字習慣を反映するものと見なし得る。京大図の作製者及び成立背景を考察する中で、この問題についても今後継続して考える必要がある。

最後に、前掲の図4に再度立ち返り、京大図に示される八旗の配置方位について注意しておきたい。

『欽定八旗通志』や『順天府志』『清史稿』などに示される八旗方位図は、すべて皇城の東北から時計回りに、鑲黄・正白・鑲白・正藍・鑲藍・鑲紅・正紅・正黄の順に配置されるのが原則である。ところが、京大図では、鑲藍と鑲紅の位置が逆転しているように見える。順治門（宣武門）内に配置されるのは、表4に明らかとおり、「廂藍」ではなく、「廂紅蒙古廳」「廂紅二甲」「廂紅四甲」「廂紅三甲廳」などの「廂紅」衙門ばかりであり、「廂藍」は、正陽門内ほど近い西交民巷に「廂藍汗（漢廳）」と、西城「西四牌樓」の南方にある西斜街に「廂藍頭甲」が分散して記されるのみである。

実は、孫（二〇〇五）によると、道光図でも、京大図と同様に鑲藍と鑲紅の位置が逆転して示されるという。²¹この現象が何を意味するのか、識者のご教示を仰ぐと同時に、今後、本地図と道光図との比較や文献的な調査を含め、さらに詳細な検討が必要となるであろう。

注

(21) 前掲の孫果清(二〇〇五)二四三―二四四頁。

おわりに

長らく書誌不詳のまま京都大学で所蔵されてきた『北京内城図』について、これが何を描いた地図なのか、類似の北京図はあるのか、成立年代はいつかなどに関して、地理学的ならびに中国文献学的な見地から予備的な調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

(一) 京都大学蔵『北京内城図』は、円形と方形と三角の記号を用いて、清代に組織された八旗(満州、蒙古、漢軍)の空間的な配置を示す地図である。三つの記号は、八旗に対応して塗り分けされ、全体で二十四種類ある。(二) 全旗数はおよそ五五〇で、満州が最も多い。蒙古と漢軍は、それぞれ蒙古の約三分の一である。(三) 満州と蒙古と漢軍の各旗の分布には、明瞭な空間的な偏りがある。満州が内城の中心部を占めるのに対し、蒙古と漢軍は、主として内城壁に沿う周辺部に位置する。(四) 調査の過程で、『道光北京内外城全図』(国家図書館所蔵(北京))が、『北京内城図』と同様、円形と方形と三角の記号を用いて八旗(満州、蒙古、漢軍)の空間的な配置を示す地図であること、同類の地図が極めて稀少であることが判明した。(五) 『道光北京内外城全図』と『北京内城図』とを比較すると、両図は、図幅の大きさ、円形、方形、三角という記号を用いて八旗(満州、蒙古、漢軍)の分布を示す点、八旗の総数などの点で、非常によく似ている。(六) 両図の明白な相違点の一つは、『道光北京内外城全図』では、三角が蒙古、方形が漢軍を示すのに対し、『北京内城図』では、方

形が蒙古、三角が漢軍を示すことである。また、前者は絹本に精密に描かれているが、後者は紙本にやや粗い筆致で描かれている。

（七）地図の成立時期については、十九世紀後半の状況を示すと考えられる。根拠の一つは、描かれる王公府の居住者の、在世及び在籍間である。もう一つは、一八六〇年義和団事件以降、東交民巷に建設された列強の大使館が全く描かれていないことである。（八）また、施設名は俗称を多く用い、記される字体も俗字体や当て字が多用されることも興味深い。

本稿で報告した予備的な調査の結果、京都大学蔵『北京内城図（八旗方位図）』は、清代における八旗研究にとって、きわめて稀少かつ貴重な資料であることが明らかになった。

この『北京内城図』については、二十四旗の詳細な分布図の作成、街区（道路と市街）のパターンや諸施設の配置などの分析、描かれた施設と名称に関する年代特定、地図作成の背景の解明など、残された調査課題が多い。こうした課題への取り組みと並行して、本図と『道光北京内外城全図』（国家図書館所蔵（北京））、さらに他にも存在する可能性のある同類の地図との詳細な比較分析を行い、これらの地図それぞれの作成年代、どのような目的で作成されたのか、どのような資料や調査に基づいて作成されたのかなどの点から、共通点や相違点を究明していく必要がある。

【付記】本研究は、科学研究費補助金「地図山水画史の構築―山西辺垣布陣図を手がかりとして」（基盤研究(C)、代表…宇佐美文理、課題番号…25370131、2013～2015年度）の成果の一部である。台湾国立故宫博物院・図書文献処の盧雪燕先生には、本研究を始めるきっかけとなる貴重なご教示をいただいた。

coloring patterns, and numbers of eight-banners of three armies. (6) One of the clear differences between these maps is the assignment of marks: in "Map of Inner City of Beijing," square indicates Mongolian and triangle indicates Han, on the other hand, in "Complete Map of Inner and Outer Cities of Beijing," square indicates Han and triangle indicates Mongolian. The latter map is very delicately drawn on silk sheets, but the former is rather roughly drawn on paper sheets.

(7) "Map of Inner City of Beijing" indicates the people's names who lived in the official residences. Based on their lifetime- or enrollment-periods, the map could be inferred to have been produced in the late nineteenth century. (8) Although many Great Powers such as England and France built their embassies in the area of Dong Jiao Min Xiang (東交民巷) since the Boxer Rebellion in 1860, there are no embassies. (9) It is very interesting that many offices and residences are indicated as their non-official names, and that informal styles and phonetic equivalent of Chinese characters are frequently used among all words written in the map.

These observation indicates that "Map of Inner City of Beijing" stored in Kyoto University might be a very rare and valuable map for the 'eight-banners' study in Qing Dynasty, and that a detailed comparative study should be carried with respect to "Map of Inner City of Beijing," "Complete Map of Inner and Outer Cities of Beijing in Doanguang Dynasty" and the other maps which may be exist somewhere. One of our future tasks is to clarify the situation and backgrounds when the map was produced.

The Eight-banners in Garrison of Manchu, Mongolian, and Han, and the
Names of Places and Facilities Presented in "Map of Inner City of Beijing"
Stored in Kyoto University: a preliminary observation

Kazuko TANAKA and Yuko KIZU

Abstract:

"Map of Inner City of Beijing" has been stored in Kyoto University. The Map has remained unknown even as bibliographic information until now. What does the map mean? Are there any other maps similar to the map? When was the map drawn? We tried to answer these questions from the viewpoints of geography and Chinese philology.

The following points are made clear: (1) "Map of Inner City of Beijing" shows the spatial arrangement of eight-banners in garrison of Manchu, Mongolian, and Han, with three marks of circle (Manchu), square (Mongolian), and triangle (Han). Each mark is color-painted in eight ways indicating the patterns of eight-banners in Qing (清) Dynasty. (2) Total number of the eight-banners is about 550. Manchu is the majority, and Mongolian and Han are about one third of Manchu, respectively. (3) Distribution of the eight-banners in garrison of Manchu, Mongolian, and Han is spatially uneven and it shows clear segregation in small scale. Manchu are located at the central part of Inner City, and the other two are mostly located at peripheral areas along the City Wall.

(4) In the course of our investigation, we found that "Complete Map of Inner and Outer Cities of Beijing in Daoguang (道光) Dynasty" is the only map which also shows the spatial arrangement of eight-banners in garrison by Manchuria, Mongolian, and Han. This map is stored in the National Library of China. (5) The two maps stored in Kyoto University and the National Library of China are very similar in terms of map size, three map marks (circle, square, and triangle), their